



宮司プレス 第百五十五号

彦島八幡宮 宮司 ニューズ

発行者 彦島八幡宮

宮司 柴田 宜夫

発行 令和二年 五月二十五日

◇宮司の柴田です。さて、私共神職に課(か)せられた使命は、「三つの奉仕」を大切にすることです。その三つの奉仕とは、「神明(しんめい)奉仕」、さらに、「清掃奉仕」、そして、「社会奉仕」であります。平安時代の建保(けんぼ)一年に、宮中の行事・儀式・政務などの故実作法(こじつさほう)全般にわたる記(しる)され、後世(こうせい)の準則(じゆんそく)となった「禁秘抄(きんぴしやう)を御著(ごちよ)された第八十四代順徳天皇(じゆんんとくてんのう)様は、「神事を先にし他をあとにする。朝夕に敬神の心をゆるがせにすることはない。かりそめにも、神宮と内侍所(ないしどころ)の宮中の御神殿のことです)に足を向けてやすむことはない」という有名な言葉を残していらつしやいます。宮司プレス百二十六号に詳述(しやうじゆつ)していますが、その順徳天皇様の大御心に添えるよう、日々、月毎、季節毎のお祭りに、襟を正して、おつとめをする、これが、「神明奉仕」であります。そして、御社殿(ごしやでん)は、言うまでもなく境

内の美化に勤めなければなりません、「清掃奉仕」であります。この「神明奉仕」「清掃奉仕」が、御垣内(みかきうち)、鳥居の内の奉仕であるとするならば、三番目の「社会奉仕」は、鳥居の外の奉仕といえるでしょうか。いろいろなお役を頂戴していますので、微力ながらお手伝いをさせて頂いています。

◇その二番目の「清掃奉仕」ですが、私は、毎日、午前七時三十分前後には、出社しておりまして、午前八時三十分から始まる朝拝朝礼(ちようはいちようれい)までが、毎朝の清掃奉仕の時間です。特に、拝殿の入口である向拝口(むかいぐち)から楼門(ろうもん)までのエリアを中心に清掃します。砂利を敷きつめてあるところは、「枯山水(かれさんすい)」は、少しおおげさですが、そのようになるよう工夫しています。拝殿より向って右側が、上位(じようい)、いわゆる上座(かみざ)となり、したがって、左側が下座(しもざ)となります。私は、その上座である右側は、縦に「めたて」をし、下座である左側は、横に「めたて」をしています。上座が、神様と私共を

つなぐ線、下座は、人と人とのつながりを表す線という思いで「めたて」をしているのです。お一日(ついたち)と十五日の月次祭には、竹の「ガンゼキ」で、「めたて」をします。「めたて」の幅が大きく、立体感がでて、「枯山水」さながらになります。しかし、毎日、竹の「ガンゼキ」を使用しますと損傷(そんしょう)が激しいので、普段は、鉄の「ガンゼキ」を使っています。幅は小さいのですが、清楚(せいそ)な雰囲気(ふんぎ)をかもします。作務衣(さむえ)姿で清掃をしますが、うつすらと額に汗ばむ季節となりました。

◇西暦七百二十年に定められた「養老令(ようろうりよう)」という法律には、月毎に行う祭典が記載されています。三月には、「鎮花祭(ちんかさい)はなしずめのまつり」として行われています。実は、疫病(えきびよう)は、桜の花びらが散って、もたらされると考えられていました。疫病退散防止(えきびようたいさんぼうし)の祈願祭(きがんさい)だったのです。今は、その「養老令」から千三百年後ですが、新型コロナウイルス感染症拡大の世相であります。まさに、「流行疫病(はやりやまい)」といえるでしょう。原因は、「ウイルス」であります。地球上には、推定で三千万種の生物が存在しています、その数だけウイルスの生存が考えられるそうです。しかしながら、病原

体などすでに知られているウイルスは、約六千六百種と、ごく一部で、いまだに人類は、ウイルスの全貌(ぜんぼう)をほとんど理解していないのだそうです。先月号に記述しましたように、「ウイルス」との戦いは永遠に続くのです。

◇文明十八年、西暦一、四六八年に吉田兼邦(よしだかねくに)が、京都の吉田神社に願いを立てて、「百首(ひやくしゆ)の神道(しんどう)の歌を詠(よ)んだ、「百首歌抄(ひやくしゆかしょう)」に、「天地(あめつち)の中にみちたる 草木(くさき)まで 神(かみ)のすがたと 見(み)つつ恐れよ」とあります。本県でも「非常事態宣言」が、解除されたとはいえ、予断(よだん)を許さない状況です。「神(かみ)のすがたと 見(み)つつ恐れよ、つつしみ深い生活を心掛(こころか)けなければなりません。明日(あした)にも、全国で解除(かいじょ)されそうでありま

す。これは、ひとえに、国(くに)や地方自治体(ちほうじつたい)の要請(ようせい)に、国民(こくみん)全ての人が協力(きょうりょく)し、落ち着(おちつき)いて生活をされた成果(せいこ)であります。まさに、日本人(にっぽんじん)の「オブリージュ」が、遺憾(いかん)なく發揮(はつぱい)された賜物(たまひもの)と思います。「オブリージュ」とは、感謝(かんしゃ)の心(こころ)・公德心(こうとくしん)という意味(いみ)です。「ありがたい」という感謝(かんしゃ)の心(こころ)、「おかげさまで」という謙虚(けんこ)な思いやりの心(こころ)で、人(ひと)さまの役に立(た)つことが、自(みづか)らの責任(せきにん)や義務(こむぎ)であると自覚(じかく)して、そのよう(よう)にふるま

うことが出来る、これが、日本人(にっぽんじん)の「オブリージュ」なのです。

◇紀元前六世紀、中国春秋時代の鄭(てい)の国の宰相(さいしやう)で、中国最初(しゅ)の成文法(せいぶんぽう)を作(つく)ったとされる子産(しさん)は、「礼(らい)とは、天(てん)の経(けい)、地(ち)の義(ぎ)、民(みん)の行(こう)である」と説(と)きました。経(けい)とは、もともと織物(おりもの)のたて糸(いと)のことで、このたて糸(いと)があ(あ)って(あ)はじめて布(ぬい)ができるわけです。したがって、人生(じんせい)を織(お)る場合(ばいばい)、経(けい)とは生き方(かた)の規範(きはん)になるもので、その規範(きはん)を天(てん)に求めよ(と)いうことを、みじかく、「天(てん)の経(けい)」と説(と)いたので、義(ぎ)もやはり規範(きはん)を意味(いみ)します。地(ち)の義(ぎ)とは、道徳(どうとく)倫理(りんり)です。民(みん)は天(てん)に学(まな)び、地(ち)になら(な)ったこと(こと)を実行(じっこう)してゆく、それが、「民(みん)の行(こう)」であります。子産(しさん)の言う「礼(らい)とは、まさに、日本人(にっぽんじん)の「オブリージュ」といえるでしょう。私の毎朝(まいあさ)の「清掃奉仕(せいじょうほうし)」、「枯山水(こく山水)」さながらの「めたて」は、「天(てん)の経(けい) 地(ち)の義(ぎ) 民(みん)の行(こう)」、「日本人(にっぽんじん)のオブリージュ」です。そのような地域社会(ちいきうかい)になりますよう、これ(これ)からも、三(さん)つの奉仕(ほうし)を大切(たいせつ)にお(お)つとめ(と)めてまいります。御自愛(ごじあい)ください。

◇四月の祭典行事会議活動報告

▼月次祭 * 四月一日、十五日

▼貴布禰神社月次祭 * 四月一日

▼竹の子島金刀比羅宮例祭ならびに新型コロナウイルス感染症流行鎮静祈願祭 * 四月五日

▼六連島八幡宮境内社荒神社例祭 * 四月九日

▼舟島神社例祭ならびに佐々木小次郎劍客大人命慰霊祭 * 四月十一日

▼彦島地区戦没者慰霊祭 * 四月十五日

▼南風泊底引き網組合網おろし * 四月二十六日

▼昭和祭 * 四月二十九日

▼神社庁関係

▼教化部代表者会議 * 四月二十日

▼下関西ロータリークラブ

▼理事会 * 四月一日、二十二日

▼その他

▼迫町自治会役員会 * 四月十六日

▼五月の祭典行事会議報告並びに予定事項

▼月次祭 * 五月一日、十五日

▼貴布禰神社月次祭 * 五月一日

▼塩釜神社例祭ならびに新型コロナウイルス感染症流行鎮静祈願祭 * 五月三日

▼神社庁関係

▼役員会 * 五月十一日

▼下関西ロータリークラブ

▼例会、理事会 * 五月二十七日

▼その他

▼迫町自治会役員会 * 五月二十日